

メディア情報を取り入れた子どもの遊び・表現

青木 久子*・高橋祥子*・中村 久美子*・村田 光子**

メディア情報として幼児の視聴率が高い『にほんごであそぼ』の番組の分析及び幼児がこの番組から遊びに取り込んでいる内容と教師・教師志望者が知っている内容の実態調査の結果、双方の意識の乖離の著しさが見られた。運営担当者はこうした実践上の課題を遊び・表現の視点から解決する方策が必要であり、その具体も見学調査にもとづきまとめた。

Key Words : にほんごであそぼ, 番組の分析, 番組視聴調査, 遊びと表現, 運営者の役割

I 問題の所在と研究の目的・方法

1. 問題の所在

純粹芸術から生活芸術、大衆芸術といった生活における表現に注目していくと、就学前教育は、幼児集団が相互作用しながら共鳴・共振していく“表現の場”として捉えることができる。平成元年に幼稚園教育要領が「絵画製作」「音楽リズム」から「表現」に変わって、多くの教師が日常の子どもの表現に注目するようになった。しかし、子どもの生活や興味の方向と、教師の表現を育てようとする方向は乖離し、本質からずれることも多い。それは、教師と子どものメディアに接する時間、内容が異なり、従来、共有してきた世界観とは異なっているからではないかと考える。そこに、表現のテーマのずれや表現する身体行為の違いが発生する。保育運営に当たるものは、こうした社会の動向と社会が発信する情報を取り込む子どもの実態を把握し、表現意欲が高まる環境の構成や共鳴者としてのかかわりを身体化することが必要である。

* 大学院人間学研究科

** 十文字学園女子大学

2. テーマ設定理由

身近なメディア情報から遊びのテーマを取り込んでくる子どもたちの表現に注目し、メディアの何が子どもの興味関心を拡大し、そこから遊びの要素が生まれてくるのかを調査研究し、保育実践現場の運営上の課題について考える。

3. 研究方法

- ①子どもたちがもっともよく見ている NHK『にほんごであそぼ』の1ヶ月分を録画し、分析・考察をする。ビデオの分析・考察の観点は次の4点とする。
 - ア. 『にほんごであそぼ』の番組構成(1日10分の構成、週の構成、月の構成)
 - イ. 長期的な構成の特徴と映像の特徴
 - ウ. 音楽分析(音楽と映像の特徴、使われている楽器、作者・編曲者など)
 - エ. 背景にある日本文化情報のルーツと具体的内容の把握
- ②『にほんごであそぼ』から取り入れた素材が、子どもの遊びのテーマや表現にどのように表れているか、アンケート調査を実施し分析・考察する。
- ③教師が『にほんごであそぼ』の題材をもとに表現活動として子どもと作り上げた表現活動を分析・考察し、運営担当者のこれからの課題を検討する。

II 研究結果

1. 『にほんごであそぼ』の映像分析

2003年4月7日から、NHK教育テレビとNHKワールド・プレミアで放送されている『にほんごであそぼ』は、就学前の子どもと親を対象にした番組である。チーフプロデューサーの坂上(2004)は、伝統的な日本語に遊びながら慣れ親しみ、豊かな言語感覚を身につけてもらうことを目的としている。子どもたちが「美しい日本語」に興味を持ち、コミュニケーション能力や自己表現する感性を刺激するよう、親しみやすく、かつ斬新な演出で見せる、ユニークな「言語バラエティ」である。

今回『にほんごであそぼ』の番組内容を映像内容と音楽の両サイドからの分析を試みる。

(1) 内容構成について

① 10分の内容の構成の仕方

『にほんごであそぼ』の番組は、放送時間が10分という短い番組である。他局の子ども向けアニメ番組の放映時間が30分間というものが多くことから比べても、圧倒的に短時間の番組であるといえる。短いといってもこの10分の番組の内容は多様多彩である。番組の主なコーナーとして、絵合わせかるた、ひらがなアニメ、日本の伝統色、投稿ごもじもじ、投稿じゅげむ、月の歌などがあり、10分間の中に「伝統的な日本語に遊びながら親しみ、豊かな言語感覚の獲得」をねらいとした様々な内容が組み込まれている。またそのコーナーの一つ一つに、

コニちゃん（小錦八十吉）、野村萬斎、さんようさん（神田山陽）、市川亀次郎、うなりやベベン（国本武春）など、個性的な出演者が出ていることもコーナーの内容を濃くしているといつてよいだろう。ここで2010年10月18日の週の放送内容をコーナーごとに色別けして簡単にあげたものが表1-1、1-2である。

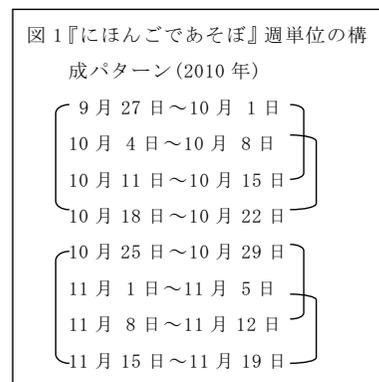
表1-1にみるように10月18日の映像の流れは、タイトル『にほんごであそぼ』、投稿ごもじもじ（投稿の俳句を五七五のリズムでコニちゃんと子どもたちが紹介）、絵合わせかるた（上の句、下の句2枚のかるたを合わせて1つの絵を完成させる。デザイン：仲條正義）、ひらがなアニメ（ひらがな一文字のもつ表情をアニメーションで表現）、ごもじもじ（お題に合わせてコニちゃんや子どもが俳句を作る）、お国ことばの旅（各地域の方言を地元の人々の生活とともに使用される場面を紹介する。出演：神田山陽）、月の歌「じゅげむじゅげむ」（今月の歌として紹介する）である。

また、土日を除く毎日、様々なコーナーが並べられている。狂言師野村萬斎が出演しているコーナーは、体の一部分から連想されることわざなどを体で表現したり、歌舞伎役者市川亀次郎が出演しているコーナーは、詩を歌舞伎風に表現したりしている。講談師神田山陽出演の早口瓦版では、昔ながらの早口言葉や新たな早口言葉が用いられ、浪曲師国本武春が扮するうなりやベベンのコーナーは、詩や物語を浪曲調にして紹介している。そして、視聴者がじゅげむや名文などを唱える投稿映像のコーナーも日によって組み込まれており、視聴者が主役になるコーナーが存在するのもこの番組の持つ特徴の一つである。

今月の歌のコーナーに関しては、その日の最後に登場することが多く、毎日のように放映されている。繰り返し放映されるものは今月の歌ばかりでなく、お国ことばの旅や早口瓦版などもあり、繰り返すことで子どもが記憶し、言葉に出して言う（言葉で遊ぶ）効果をねらいとしていると考えられる。

② 内容構成パターン

NHK『にほんごであそぼ』のホームページには、番組紹介として今後の放送予定として番組の放送日と内容が載っている。分析し気づいたことは、週単位で過去に放映された内容と同じものが放送されていることであった。そこで実際に2010年9月27日から11月19日の計40日間の放送内容を並べ検討した結果、毎日違う内容の構成と思われていた『にほんごであそぼ』の番組の週単位の構成パターンが見えてきた。分かりやすく図式化すると図1のようになる。



このことから、内容構成が4週間をひとまとまりとして構成し、1週目と3週目、2週目と4週目の隔週で同じ内容を繰り返していることがわかる。また各4週のひとまとまりは、1年

「メディア情報を取り入れた子どもの遊び・表現」(青木久子・高橋祥子・中村久美子・村田光子)

表1-1 NHK『にほんごであそぼ』タイム表(2010年10月18日~10月29日)

	10月18日(月)	10月19日(火)	10月20日(水)	10月21日(木)	10月22日(金)	10月25日(月)	10月26日(火)	10月27日(水)	10月28日(木)	10月29日(金)
0:00	題字 23秒									
	投稿ごもじもじ 「ゆでたまご まったなみは おつきさま」 79秒	投稿ごもじもじ 「みえない いけみえるも もあるんだ よ」69秒								
	映画「にほん」4秒									
	絵合わせかるた 「ななこびや おき」63秒									
	映画「ななこびや おき」33秒									
	ひらがなアニメ 「な」36秒									
	こにちゃんごもじもじ「お題 たまご」89秒									
	お国ことばの旅 「だんない」 124秒									
	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」123秒	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」86秒	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」79秒	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」115秒	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」86秒	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」67秒	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」67秒	今月の歌 「じゅげむじゅ げむ」97秒	今月の歌 「おっと合点承知 の助音頭」 99秒	今月の歌 「おっと合点承知 の助音頭」 99秒
10:00	今日の名文10秒	今日の名文30秒	今日の名文10秒	今日の名文10秒	今日の名文10秒	今日の名文15秒	今日の名文15秒	今日の名文15秒	今日の名文10秒	今日の名文10秒

表1-2 NHK『にほんごであそぼ』タイム表(2010年11月1日~11月12日)

	11月1日(月)	11月2日(火)	11月3日(水)	11月4日(木)	11月5日(金)	11月8日(月)	11月9日(火)	11月10日(水)	11月11日(木)	11月12日(金)
0:00	題字 23秒	題字 23秒	題字 23秒	題字 23秒	題字 23秒	題字 23秒				
	日本の伝統色 「黄金色」50秒	うなりやべん 「二十四節気」 76秒	うなりやべん 「二十四節気」 76秒	二十四節気を唱 える子ども&コ ニちゃん 72秒	絵合わせかるた 「でんでらりゅ うばでてる ばってん」77秒	投稿ごもじもじ 74秒	投稿ごもじもじ 74秒	投稿ごもじもじ 74秒	投稿ごもじもじ 74秒	投稿ごもじもじ 74秒
	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒	投稿ごもじもじ 103秒
	俳句「秋深き隣 は何をする人 ぞ」52秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒	ひらがなアニメ 「ひ」41秒
	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒	絵合わせかるた 「あせは成る為 さばならぬ何 事も」72秒
	野村萬壽 「合点か」104秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒	野村萬壽 「合点か」128秒
	お国ことばの旅 「やつす」 46秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒	お国ことばの旅 「やつす」 54秒
	今月の歌 「たのしやかぶ き」114秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」73秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒	今月の歌 「たのしやかぶ き」75秒
10:00	今日の名文10秒	今日の名文10秒	今日の名文10秒	今日の名文10秒	今日の名文10秒	今日の名文15秒	今日の名文15秒	今日の名文15秒	今日の名文10秒	今日の名文10秒

の中で、ある規則性をもって繰り返されていることが予想される。これが季節感や話題性を常に新しくして、新鮮さと豊富な日本語の世界を提供しながら繰り返すことで子どもの記憶に残りやすくし、親しみが湧くような効果があるのではないかと考える。

このように『にほんごであそぼ』は、10分間のうちのコーナーごとの繰り返し、4週ひとまとまりの繰り返し、1年のあるまとまりの繰り返しによって、子どもの記憶にとどまりやすい要因を備えていることがわかる。

③ 二十四節気の構成

日本語の豊かさを日本の伝統文化の中から感じ取る内容で構成されている。11月1日～5日、15日～19日の番組で多く取り上げられていた一つに「二十四節気」がある。

二十四節気は我々の日常生活と意外に密接な関係にある。例えば、夏の挨拶の「暑中見舞」が立秋を境に「残暑見舞」に変わることや、「寒中見舞い」の「寒中」が二十四節気の「小寒（しょうかん）」と「大寒（だいかん）」にあたる期間であることなどから、我々日本人は無意識に日常生活のあらゆる場面において、二十四節気に応じて生活していることがわかる。

二十四節気とは、節分を基準に1年を24等分して約15日ごとに分けた季節のことである。1ヶ月の前半を「節」、後半を「中」と言い、その区分点となる日に季節を表すのにふさわしい春・夏・秋・冬などの名称を付けている。二十四節気は、中国の戦国時代の頃に太陰暦による季節のずれを正し、季節を春夏秋冬の4等区分にするために考案された区分手法の一つである。本来は約2600年前の中国の黄河地方の気候に基づき作られた暦であるため、実際の日本の気候とは多少のずれが生じる。しかし、毎年同じ時期に同じ節気がくるとか節気感覚が約15日で一定しており、半月ごとの季節変化に対応出来ることなどから、農業の目安としては非常に便利であり、農耕文化を中心とした日本に導入されるようになった。

『にほんごであそぼ』では、この二十四節気を映像や音や体で表現したり、浪曲調に歌ってみたりと親しみやすく取り上げている。例えば、11月2日(火)の内容を参考にあげてみる。オープニングに浪曲師国本武春が扮するうなりやベベンが、浪曲調で春の季節の「立春」「雨水」「啓蟄」「春分」「清明」「穀雨」を歌うと、次のコーナーではその二十四節気をイメージする音をバックに子どもたちが唱え、そして続いて小錦八十吉扮するコニちゃんが子どもたちと「立春」「雨水」「啓蟄」「春分」「清明」「穀雨」を一つ一つ表現する。そしてこの週は1日ごとに春・夏・秋・冬の二十四節気が取り上げられている。

日本では、明治5年の太陽歴への改暦で二十四節気は暦としての役割を終えるが、現在でも我々の暮らしの中に生き続けているものといえるであろう。これは、日本の文化の一つであり、美しい日本語の世界として取り上げている本番組の趣旨を垣間見ることができる。この考え方は、論語、平家物語、日本の名文といわれる様々な文章の一節や詩、諺、言葉遊び、歌舞伎や狂言などの動きや台詞、方言、色などすべてに共通するもので、今日の人々が忘れ去っている日本の伝統文化を、日常に埋め込まれている中から顕在化させている。そしてその背景には、専門的な研究を基礎とした内容が取り扱われていることがわかる。

(2) 映像のもつ特徴

『にほんごであそぼ』のデザイナー佐藤、ひびの(2004)は「映像面では『クオリティの高いものに幼児期から触れることが高い感性を育てる』という考えでセットや衣装を製作しています。また、文字だけのアニメや、狂言など伝統芸能を斬新な手法で描くなど、これまでにないテレビ番組の映像表現にもチャレンジしています」と述べている。まさに、映像表現が豊かであるということもこの番組の特徴である。

『にほんごであそぼ』では、日本の伝統色も多く取り上げられている。10月21日(木)には「茜色」、11月1日(月)には「黄金色」といった日本の伝統色465色の中から季節にあった色を紹介している。「アキアカネ」「茜雲」「黄金色の稲穂」など、昔から使われている伝統色の言葉を実際の映像にして見せることは、視聴している子どもにとっては理解しやすい。また絵合わせかるたでは、上の句、下の句を切り絵で表し、文のイメージを視覚的にわかりやすくしている。絵合わせかるたであるから、上の句と下の句の絵を合わせて考える。大人は書いてある文字を見て、下の句がどれか考えてしまう傾向がある。しかし、幼児は絵の方を見て下の句をすぐに当ててしまう。このことから、幼児はテレビという視覚的な部分が多い動的映像をすぐに理解し、楽しむことができるといえる。そこでここでは、子どもの視覚的な刺激を与えているものの一つとして、月の歌「じゅげむじゅげむ」の映像について考える。

「じゅげむじゅげむ」は、落語の前座でポピュラーな「寿限無」をアニメーションにしたものである。「寿限無」の話は、生まれた子どもの名前を和尚さんにつけてもらおうと考えた父親が、縁起のいい言葉をたくさん紹介されてどれにするか迷ったあげく、全部付けてひとつの名前にしてしまったという内容である。月の歌では、縁起のいい長い子どもの名前に合わせ、言葉の抑揚をメロディーにしたカノン形式の音楽で構成されている。

『にほんごであそぼ』ではそれぞれの歌詞の意味に合わせ、白黒の切り絵が動いているアニメーションで表現されている。

幼児が読み親しむ川端誠(1998)の落語絵本では、
「^{ことぶき}寿、^{かぎ}限り、^な無しで、^{じゅげむ}寿限無じゃ」五劫は「^{いっこう}三千年にいちど、^{いわ}天女がまいおりて、はごろも
で^{いわ}岩をこする。この^{いわ}岩がすりきれてなくなるのが^{いっこう}一劫。これが^{いっこう}五つもあるのだから、^{かぎり}かぎ
りがないのとおなじじゃよ」「^{かいじや}海砂利^{すいぎょ}水魚というのはどうじゃ。^{うみ}海の砂、^{すな}水に住む^{みず}魚のかずは、^すかぎ
りがない」「^{すいぎょうまつ}水行末、^{うんらいまつ}雲来末、^{ふうらいまつ}風来末、というのもある。水^{みず}のゆくすえ、雲^{くも}のゆくすえ、風^{かぜ}
のゆくすえには^{かぎり}かぎりがない」「^く食う^ね寝るところに住む^すところ。人^{ひと}にはなくてはならぬ^{たいせつ}大切な
ものじゃ」「^{むかし}むかしからやぶ^{こうじ}こうじという木は、^めめでたいもの^{じゃ}じゃった^{そう}そうじゃ」(学名：Ardisia
japonica、別名十両と言われる常緑小低木)「^{ふる}ふるーい^{ちゅうごく}中国に、^くパイポという^{くに}国があつて、そこ
の^{おう}シューリンガンという^{おう}王さまと、^{グー}グーリンダイという^おおきさきに、^{ポン}ポンポコピーと^{ポン}ポンコ
ナーという、^{ふたり}ふたりの^{ひめ}お姫さまがいて、これが、^{なが}たい^{なが}そう^{なが}長生き^{ひさし}だった^{なが}そう^{ひさし}じゃ」「^{なが}長く^{ひさし}久し
い^{いのち}命とかいて、^{ちようきゅうめい}長久命、^{なが}まあ、^{たす}わしなら、^{なが}長く^{たす}助けるとかいて^{ちようすけ}長助とでもするかな」

と、めでたいものの意味を説明している。

この「じゅげむ」の歌詞の意味を、言葉で聞いただけで理解することは難しい。しかし、映像として、言葉の意味を表す画像を見ることで、言葉と画像が一致し、子どもの理解度が上がると考えられる。番組制作者は、『『長〜い名前』の最後に、じゅげむ君が返事をしています。みんなが早口言葉で覚えているじゅげむは、とっても縁起のいい『人の名前』だったんだなあ、と感してもらえればいいな、と思います』とコメントを載せている。「寿限無」の話を覚えさせることがねらいではなく、おおまかな内容を「感じる」という幼児の五感に刺激をあたえることが、『にほんごであそぼ』のねらいの一つなのであり、そして五感への刺激を効果的に与えるために、動きのある映像が考えられているのだと思われる。

『にほんごであそぼ』は、2004年にグッドデザイン賞を受賞している。審査委員の佐合(2004)から「コミュニケーションの手段である『言葉』に焦点をあて、子供が楽しみながら自己表現能力を育むことのできる教育番組。伝統的な日本語の豊かさへの興味、関心を促す映像表現は斬新で非常にクオリティが高い」とのコメントがある。このことから、『にほんごであそぼ』の映像は質のよいものとして考えられるのではないだろうか。

(3) 音楽分析

番組は、映像とともに独自の音楽、そして演者によって進められ、構成されている。取り上げられている音楽は、「楽しく『日本語感覚』を身につける」というねらいを達成するために、各分野の専門家による本物で、多彩な曲作りがなされている。

そこで、2010年10月18日から11月19日までの1ヶ月間に取り上げられた音楽について演者、作詞、作曲、使用されている楽器、リズムや旋律などの項目で分析を行う。

① 演者

演者たちは、日本の伝統芸能の担い手である専門家であり、伝統に基づいた衣装を身に付け、作法に則り美しく舞ったり演じたりしている。子どもたちの衣装も、作法に従って作られたものである。

- ・狂言師：野村萬斎・講談師：神田山陽・浪曲師：うなりやベベン（国本武治）
- ・人形浄瑠璃：豊竹咲甫大夫、鶴澤清助・歌舞伎：市川亀治郎・歌舞伎囃子方：田中傳左衛門・小錦八十吉・子どもたち

② 作詞

現在、日本語は社会の中で様々な変化をしてきている。しかし、俳句や短歌で用いられる五・七・五調や、付け足し言葉には、日本語が本来もっている「音」の美しい様式美がある。それらを、改めて取り上げてメロディーをつけることにより、言葉と音楽が一体化した歌となって伝えられる。子どもたちには、難しいのではないかとと思われる古典落語や文学作品であるが、演者の子どもたちは本物の言葉のもつ力を丸ごと受け止めている。そして、その歌に親しむことが、楽しく『日本語感覚』を身につけることにつながっていると考えられる。

- ・古典落語や歌舞伎の一節 - 「じゅげむじゅげむ」「切られ与三・武蔵坊弁慶」

- ・文学作品の原文－「枕草子」清少納言「蜘蛛の糸」芥川龍之介「雨ニモマケズ」宮沢賢治
－「ちんちん小袴」小泉八雲「山のあなた」カール・ブッセ
- ・生活の中で使う日本古来の言葉－和風月名，二十四節気，漢数字，助数詞など
- ・日本語の付け足し言葉
- ・五七五の俳句

③ 作曲

幅広い音楽表現能力と国際感覚をもった人材によって，日本語による日本語のための新しい表現が生み出されている。

- ・「うなりやベベン」

浪曲師の国本武治であり，浪曲師の枠を超え，様々なジャンルの音楽とのセッションも行っている。

- ・「BANANA ICE」

日本のラップユニット『下町兄弟』の中心人物で，幼児番組「ひらけ，ポンキッキ」に曲を提供した経験もある。

- ・「おおたか静流（しずる）」

映像音楽など多数手がけ，音楽のジャンルや国境を越えた音楽活動を展開している。

④ 様々な楽器や音

幼児が，園で歌を歌ったり音楽的な活動をしたりするときには，ピアノが使われることが多い。しかし，番組分析から，歌や音楽に使われている楽器は，ピアノ以外のものが多いことが分かった。

また，日本古来の楽器だけではなく，サンバやタンゴなど外国の音楽で使われている楽器なども積極的に使われている。様々な音と日本語の組み合わせという新しい表現が，日本語の持つ可能性をさらに広げているように思う。

- ・日本古来の伝統的な楽器－三味線・笛・尺八・和太鼓・箏・ちゃんちきなど
- ・普段よく耳にする楽器－ギター・ベース・ドラム・ピアノ・キーボード・アコーディオンなど
- ・珍しい外国の楽器－キューカ（サンバの楽器）・スチールドラム・銅鑼（どら）など
- ・幼児が園で使っている身近な楽器－カスタネット・トライアングル・タンバリン・鈴など

⑤ 様々なリズムや旋律

- ・狂言，長唄，文楽，音頭
- ・マンボ，タンゴ，ロック，ラップ，アカペラなど
- ・五線譜には表せない日本旋律
- ・わらべ歌
- ・和風月名や枕草子とラップ
- ・三味線と8ビート

・松尾芭蕉と文楽など

日本語と日本古来の楽器，世界の楽器，様々なリズム，旋律など，新しい組み合わせによる新しい音楽が生まれていることから，日本語の大きな流れの変化が感じられる。番組は，ことば，リズム，メロディー，身体表現，映像が一体になって表現されており，身近なメディアの情報から，楽しく『日本語感覚』を身につけている子どもたちが増えていると考える。次の表2-1，表2-2はその分析結果である。

表 2-1 NHK『にほんごであそぼ』音楽分析

月の歌 (2010年10月18日～11月19日放送)

	曲名	作詞者	作曲者	歌・動きの表現	楽器・音	備考
1	じゅげむ	おおたか静流	おおたか静流	子どもたち	三味線・太鼓	
2	雨ニモマケズ	宮沢賢治	おおたか静流	子どもたち	三味線・太鼓	
3	じゅうにかげつ	和風月名	BANANA ICE	小錦八十吉 子どもたち	ギター ベース	ニ長調
4	そうとうほんきの 助数詞マンボ	渡辺 創 NHK エデュケー ーショナル	BANANA ICE	小錦八十吉 子どもたち	管楽器・打楽器・ペー ス・ピアノ	マンボ へ短調 助数詞
5	蜘蛛の糸	芥川龍之介	うなりやベベン	うなりやベベン， 子どもたち	三味線・アコーディオ ン・キーボード	ニ短調
6	おっと合点承知 之助音頭	おおたか静流	おおたか静流	子どもたち	和太鼓・ちゃんちき	音頭，付 足言葉
7	まくらのそうし (春～冬)	清少納言	BANANA ICE	小錦八十吉 子どもたち	キーボード・打楽器 ・笛・トライアングル	
8	数えてナンボ	おおたか静流	おおたか静流	小錦八十吉 子どもたち	ドラム・そろばん	マンボ 漢数字 読み方
9	たのしや歌舞伎 - 切られ与三・ 武蔵坊弁慶	「与話情浮名横 櫛」・「勸進帳」 より	今藤長龍郎 編曲：田中傳左 衛門	長唄：今藤長龍 郎，市川亀次郎 子ども	三味線・笛・太鼓・ 尺八・箏	
10	うなりやベベン 二十四節気	二十四節気よ り	うなりやベベン	うなりやベベン	三味線	ト長調 8ビート
11	でんでらりゅう ば	わらべうた	編曲：おおたか 静流	おおたか静流 子どもたち	太鼓・シンバル・カ スタネット・ドラ	

表 2-2 NHK『にほんごであそぼ』音楽分析

今日の名文・わらべ歌など (2010年10月18日～11月19日)

	内容	作詞者	特徴	歌・動き表現	楽器・音	備考
1	ごもじもじ	投稿者	同じメロディ ーで紹介	子ども ラジカセ役	クイーカ，俳句内 容に合わせた音	5・7・ 5調
2	ちんちん小袴	小泉八雲	子ども用和服 着用で踊る	子どもたち	笛・三味線・和太鼓・ ちゃんちき	今日の名 文
3	ちんちん小袴	小泉八雲	詩をリズムカ ルに歌う	うなりやベベン	三味線	今日の名 文
4	秋深き隣は何を する人ぞ	松尾芭蕉	文楽	豊竹咲甫大夫， 子ども	三味線，パイプオ ルガン	

5	山のあなた	カール・ブツセ		小錦八十吉 子どもたち	ドラム・キーボード	ラップ
6	ひとまねこまね	編曲：おおたか静流	わらべうた 遊び歌	子どもたち		日本音階
7	いちわのからす	編曲：おおたか静流	わらべうた, 遊び歌, 大縄 跳び	女性歌手	アカベラ	日本音階
8	「シグナルとシグナレス」	宮沢 賢治		子どもたち	蒸気機関車汽笛音・ 弦楽器・鉄琴	今日の名文
9	為せば成る 為さねば	上杉 鷹山	意味をレンガ 積みの家を作る 動きで表現	野村萬斎 子どもたち	レンガ音・スチール ドラ・和太鼓・鈴・ 笛・箏・弦楽器	音頭 タンゴ
10	「春」	二十四節気より		子どもたち	水の音・鳥の声・ エレクトーン	
11	春の体操	二十四節気より	言葉にポーズ を決めている	小錦八十吉 子どもたち	スネアドラム・大 太鼓・笛・タンバ リン	マーチ
12	「夏」	二十四節気より		小錦八十吉 子どもたち	蟬の鳴き声	
13	夏の体操	二十四節気より	言葉にポーズ を決めている	スネアドラム	大太鼓・笛・タン バリン	マーチ
14	「秋」	二十四節気より		小錦八十吉 子どもたち	踏切の音・汽車の 音・箏	
15	秋の体操 立秋	二十四節気より	言葉にポーズ を決めている	スネアドラム・ 大太鼓・笛・タンバ リン		マーチ
16	「冬」	二十四節気より		小錦八十吉 子どもたち	シメ太鼓・和太鼓	
17	冬の体操	二十四節気より	言葉にポーズ を決めている	スネアドラム・ 大太鼓・笛・タンバ リン		マーチ

2. 日本人のアイデンティティ再考

(1) 企画者の目指す未来

幼児から小学校低学年の子どもを対象に制作・放映されている『にほんごであそぼ』は、日本語の豊かな表現に親しみ、日本語感覚を身につけることを<ねらい>として、企画監修には齋藤孝があたっている。

暗誦文化が絶滅の危機に瀕している今、齋藤はその復活をねらって『声に出して読みたい日本語』(2001)全6巻に始まり、日本語のトレーニングテキストとして『理想の国語教科書』(2003)同赤版を編み、あらゆる機会に音読暗誦を実践して示している。『声に出して読みたい日本語』のおわりの中で齋藤は、暗誦文化は型の文化である。型の文化は強力な教育力を持っている。一度身につけてしまえば生涯を支える力となる。日本語の感性を養うという観点から見れば、暗誦に優るものはない。最高のものを自分の身の中に染み込ませることによって、日本語の善し悪しが感覚としてわかるようになる。モーツァルトを聴くことで、音楽の質を感じるとる感性が養われるように、できるだけ早い時期に最高級の日本語に出会う必要がある。意味がわかる

かわからないかはあとからでもよい。たとえ意味がわからなくとも、その深みや魅力は伝わるものであると述べ、「日本語の宝石」として歴史の中で吟味され、生き抜いてきた名文、名文句を幅広い出典より厳選し、親子で暗誦文化をいっしょに楽しんでほしいと願っている。

また、著書『子どもの日本語力をきたえる』(2002)で、すべての活動において基本になるのは母国語能力だという考えを示し、その言語の持つ文化的な力がしっかりと自分の技となっているかどうかが問題であるとする。しかし、この日本語力がこの50年で完全に地盤沈下してしまった。そのため身体を使いながら日本語力をきたえていかなければならない。読書ができない子どもは、日本語力が低い。読書ができないということは、文章だけでなく、人間同士のコミュニケーションにおいても理解力が低い。言語、特に母国語教育というのは、吸収力の高い時期に徹底的にやっておくと、相当高いレベルにいける。スポーツと同じで、最良のものに出会い、大量の反復練習をこなすことで身体に染み込む。また、子どもは漢字の多い文章を好み、構造的に理解すれば、急速に身につくと述べている。

このことは石井が著書『石井式漢字教育 0歳から始める脳内開発』(1997)で子どもの学習というものは、どんな学習でも国語力が基本になっている。仮名より漢字のほうがやさしい。幼児期のうちに、子どもに本を読む力をつけてやるための手助けとして漢字教育を毎日継続することが大切と述べているのと重なる。

『にほんごであそぼ』は小錦八十吉ほか、歌舞伎役者、狂言師、落語家、講談師、浪曲師などが狂言や義太夫をはじめとする古典芸能の中にある美しい日本語をプロの技をこらして、いろいろな角度から紹介している。さらに詩、俳句、わらべうた、掛けことばや早口言葉、付け足しことばなどの言葉遊び、ことわざや慣用句などバラエティに富んだ内容を音楽的、身体的、造形的な美的表現で発信している。大人以上に身体が柔らかく、リズムやテンポを楽しむ身体感覚が優れている幼児がリズム、テンポ、響きなど、日本語としての調子のよさや語感を理屈抜きに楽しむことができ、くり返しの中で身体に染み込んでくるのは、まさに『声に出して読みたい日本語』の幼児向きメディア版といえよう。

放送開始より9年目を迎え、全国各地で幼児が“寿限無”を言えるようになるなど、番組を通して古典や伝統文化に触れ、楽しみながら暗誦する姿が見られ、日本語文化は新しい時代に入ったかと思われる。番組を見てリズムや響きを楽しむだけではなく、『にほんごであそぼ』を見て育った子ども達は、中学生、高校生になったとき、何の抵抗もなく古典を暗誦し古典に親しんでいるのであろうか。名文、名文句の記憶が何気ない日常のやり取りの中に引用されたり、読書につながったりしていくのであろうか。古典が再び日本人の心を潤し、日本語のパワーを体内に備えた人間が文化や政治・経済を支えるようになり、新たな文化の創造につながっていくことも予想される。

(2) 教育基本法と学習指導要領、幼稚園教育要領

第2次世界大戦後60年ぶりに改訂された教育基本法(2006)は、その前文に「個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育

成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」として、民主的で文化的な国家発展の理想を示した。それは小学校学習指導要領に反映されて、総則の第1に「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国の郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成する」教育課程の編成、実践を掲げた。

〔第1学年及び第2学年〕の国語には、「姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと」「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること」という「話す、聞く」の基本とともに、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕として「伝統的な言語文化に関する事項」に「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」が示されている。伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項が列記され、ひとまとまりになったことは特筆すべきことである。戦前への回帰といった国家権力の介入に傾くことなく、古代から伝わる本来の日本の文化伝統を尊重することで国際社会に貢献できる日本人の精神の軸が形成されるのかどうか、新しい教育実験でもある。

国語では、毛筆（第3学年）、文語調の文章への親しみ（第5.6学年）が、社会においては、古くから残る暮らしの道具や地域に残る文化財・年中行事、先人の足跡といった内容（第3.4学年）が、算数ではそろばんが復活し（第3学年）、音楽では箏や尺八を含めた我が国の音楽、わらべうたや民謡などの日本の美しい四季に関連した歌（第5.6学年）が、体育では地域の歌や踊りを伴う伝承遊び（第1.2学年）が、道徳では郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ（第1.2学年）、郷土の文化と伝統に親しみ、それを大切にし郷土を愛する心を持つ（第3.4学年）、郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、日本人としての自覚をもち、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ（第5.6学年）といった内容が示されている。

この方向性は、中学校での国語に古文や漢文の基礎が掲げられ、音楽・美術の指導内容は根本的に大きく転換した。また保健体育で武道や柔道が、家庭科においても和服縫製の基礎があげられている。高等学校の教育課程では、こうした小中学校の積み重ねの上に、全教科にわたって大幅に内容が改訂され、日本人の精神生活や信仰、人間観や自然観、宗教観も教育内容としてあがってきている。芸術科目の内容が大きく変わることも特徴で、ここに表現することによって日本人としてのアイデンティティを形成していく方向性がみられる。

第2次世界大戦後の占領下における教育基本法の限界を日本人のアイデンティティを再考することによって超えようとする学習指導要領であるが、幼稚園教育要領では、直接的に伝統的な文化や歴史を学ぶ内容は触れられていない。幼児期の生活を基本とした陶冶過程は、幼児が生活する環境に重点があるため、地域社会との関連が強く打ち出されている程度である。しかし、学校教育法第22条で位置づけられた「義務教育及びその後の教育の基礎」として、小学校との関連が強く打ち出されている。当然、小学校で押さえられた日本の文化伝統への興味・関心、親しみや愛着は幼いころから培われるもので、そうした文化土壌が形成されていくこと

が重要といえよう。

『にほんごであそぼ』が9年前から放映され、教育基本法や学習指導要領を先取りしていることを考えると、こうした文化に親しんだ世代が、10年、20年と積み重なって一つの世代を構成したとき、日本の文化に対する考え方は大きく変わってくると思われる。子ども達は、こうした文化の変遷過程についていくことができるが、日本文化から離れて久しい教員の方が、知識も技術もつながりもなく孤立していくという課題も抱えている。それは、中高校の教員養成課程では音楽や芸術科目等を中心に日本楽器が扱える人材の育成等に取り組んでいるが、まだ小学校や幼稚園教員養成課程では、時代の流れについていけないのが現状である。

(3) アンケート調査結果の考察

『にほんごであそぼ』の視聴率は、NHK放送文化研究所の調査によると44%（2003）、28%（2008）と安定した数値を示している。この番組が他の幼児番組の内容を大きく変え、「お話し絵本」で落語が多く取入れられるなど新しい日本語の世界を牽引する役割を果たしている。そこで、幼児をもつ保護者、学生、保育者の番組に対する視聴の実態および内容に対する感じ方、保育実践現場での生かし方などをアンケート調査（2010年11月～12月）した。結果は次の通りである。

①保護者の『にほんごであそぼ』に対する視聴実態と意識

保護者の視聴実態（210名中134名回答：回収率64%）は、見ていない人が4%（3歳児のみ）、96%が見ている。よい番組と捉えている保護者は88%、ふつうが12%で、悪い番組と認識している保護者はいない。興味をもつ年齢は3～6歳が65%と一番多く、ついで6～8歳19%、0～3歳16%である。保護者が番組で子どもと一緒に遊ぶ内容は「じゅげむ」「わらべうた」「ややこしや」「今日の名文」「歌舞伎」の順である。遊ばないという回答は7%と少ない。

②学生の『にほんごであそぼ』に対する視聴実態と意識

教育学を学ぶ大学生の視聴実態（86名中78名回答：回収率91%）は、見たこと有が57%、無が43%である。見た学生で今でもたまに見るが67%と高い。番組評は、よい54%、ふつう41%、悪い5%である。この番組に興味をもつ年齢は、0～3歳23%、3～6歳32%、6～8歳が36%で子どもの生活が分からない分、保護者より拡散している。将来保育で取り上げるかという質問には、取り上げる47%、どちらともいえないが50%、取り上げない2%で、未来がまだ不透明なことがうかがえる。番組の内容については、保護者と同様の傾向を示し、保育に取り上げる場合も「じゅげむ」「わらべうた」「ことわざ」「からだことば」となっている。

③保育実践者の『にほんごであそぼ』に対する視聴実態と意識

保育者については3園の37名が調査に協力してくれた。この番組を見たこと有27名、無10名、有の人で見た時期は5年以内が7名、5から10年が6名、10年以上前が14名であり、我が子を育てた教員の方がより多く視聴している。番組の内容について、よいは18名、ふつうが7名、よくないが2名、分からないが12名である。興味をもつ年齢については、0～3歳が5名、3～6歳が24名、6～8歳が13名である。番組内容でよいは「じゅげむ」「わらべ

うた」「歌舞伎」「狂言」の順である。子どもの遊びに見られるものは「じゅげむ」「ややこしや」「わらべうた」で後はほとんどない。保育で取り上げたことの有 10 名、無 20 名で、取り上げた内容は「じゅげむ」と「ややこしや」である。学級の中で見たことのある子ども数を聞いてもらうと、3 歳児が 2/3、4、5 歳児は全員と回答している。

④アンケート調査の全体考察

保護者は、この番組を選択して子どもと一緒に見る事が多い。また夕方は、子どもがこの番組を視聴しているうちに夕食の準備等を行うなど活用している。映像の美しさ、言葉の新鮮さ、飽きさせない内容転換の早さと繰り返されるテーマなど、番組の特徴が子どもを惹きつけていると感じている。学生も半数以上が、かつて、あるいは今見ている実態が把握された。幼児教育学を学ぶ学生のためか中には知的早教育の手法が取り入れられていることに違和感を覚えて悪い番組と認識している者もある。この番組から一番遠いのが教師である。朝は仕事に出てしまう時間帯であり夕方もまだ帰宅できない時間帯のため見る機会が取れないためと思われる。そのため、園内では自然発生的に子どもが言葉を唱えたりわらべうたを遊ぶ姿は取り入れたりしているが、陶冶財や表現として取り込んでいく意識はほとんど見られない。

(4) 表現芸術と保育実践

①幼児の『にほんごであそぼ』への興味関心

『にほんごであそぼ』は、10 分の内容に物語性は弱いが日本の伝統文化を再創造する新しい日本語、日本文化を感じさせる。それが新鮮な情報として幼児を引きつけている要因の一つである。もちろん、アニメのヒーローになり正義を実現しようとする戦いごっこがなくなったわけではない。しかし、無意識の中にすりこまれていくメディアの戦略は、9 年にわたり、確実に次の世代を生み出している。メディアから得た情報も、興味をもち、おもしろがり一緒に興ずる他者がいればやりとりが成立し、表現素材となって子どもの遊びの世界で再創造される。幼児がアニメの主人公になって戦いごっこに興ずるのも、『にほんごであそぼ』の言葉の世界に興ずるのも同じである。違うのは番組のもつ特性が、前者は悪と戦い正義を実現するヒーローであり、後者は言葉の世界の遊びであるということである。

ラジオやテレビなどの映像媒体や幼児の絵本などなくても、言葉を遊ぶ家族の生活が日常にあった時代は、二十四節気の営みにあわせた言葉が生活の中の文化として幼児の身体にすり込まれていた。言葉は、生活や労働、祭り、遊びなど現実の世界で使用され、他者に通じることで本来の言葉の意味をもつ。つまり、言葉の意味を表現する生活があることで意味をもってくる道具である。それは、他者との言葉によるコミュニケーションによって創り出す豊穡な世界であって、幼児期に言葉を獲得することは、語彙を獲得することではなく、言葉のやりとりによってこの共有する世界を創り出すことである。

そうした意味では、幼児が興味をもっている『にほんごであそぼ』も、他者との遊びになっていかないかぎり、あるいは生活の営み事とつながっていかないかぎり、語彙の世界になってしまう番組である。言葉に関する興味は、周りの他者の言葉とつながったとき、おもしろさを

創出するといえよう。

②子どもの生活世界と表現芸術

芸術を大きく純粋芸術と限界芸術に分けたのは鶴見俊輔（1975）である。彼の区分によると純粋芸術は専門的芸術家によってつくられ専門的享受者をもつ。一方、限界芸術は非専門的芸術家によってつくられ非専門的享受者によって享受されるとする。その中間にある大衆芸術は、専門的芸術家によってつくられはするが、制作過程は合作の形をとり非専門的享受者に享受される。かつては、大衆芸術、生活芸術は純粋芸術と一線を画するものではなかったが、20世紀以降、二者の分裂は決定的で教育・保育界もこうした芸術の見方に傾いたため、子どもの作品や生活芸術に対する価値は下降した。清水満（2010）は、カントを引用し、本来美的な判断は「美は主観的な普遍妥当性を要求する」ものでもあり、主観的普遍妥当性であるがために他者とのコミュニケーションの媒介となるものだが、芸術の区分は日常生活を美的判断から切り離していきやすいとする。

特に幼児期の表現は、知覚システムを通して身体化した経験を再構成し、言葉で、身体で、音楽で、造形でと様々な表現媒体を使って外部の者と共振する活動で、双方に大きな喜びをもたらすものである。幼児は、表現することによって外界と関係結び、外界を取り入れ、再創造していく存在であり、幼児期から表現者としての自己を自覚化することが重要である。青木（2010）は、トルストイの『芸術論』の定義を引用して「『一人の人が意識的に何か外に見えるしるしを使って自分の味わった心持を他の人に伝えて、他の人がその心持に感染してそれを感じるようになるという人間の働き』であり『私たちの生活を満たしているものはみな、芸術の働き』であり、人間の生活を活性化させ自己存在感・アイデンティティを確立していくもの」としている。そして、かつて日本人が実生活に根を下ろした民衆の祈りや遊びの過程に生まれ、大衆によって洗練されていった日本人の芸術観に注目することを強調する。そこに根拠を置かず、純粋芸術のまねごとになってしまう教育界の表現は、表現者としての子どもを育てない。逆に、年齢が上がるほど表現に対する苦手意識を培ってしまう危険がある。

筆者たちが見学したK幼稚園5歳児の表現活動「河童百年」では、表現者としての子どもの姿を見ることができた。教師と子どもが一緒に作りあげたその物語や表現にはふんだんに『ほんごであそぼ』の世界が埋め込まれている。「おちゃのこさいさいへのかっぱ」「けっこうけっこう、さすがとの」「しらざあいつてきかせやしょう」「みえないけれどもあるんだよ」といった言葉は、付け足し言葉や白波五人男の台詞、詩の一節である。また、動きには歌舞伎や狂言の動きなどが取り入れられている。「心がこもっていないからっぽの言葉ばかり使う人間たちを河童は寂しく思い、人間を河童にして、見えないけれどもあるいろいろな心をよく見る」ことを、表現活動を通して幼児の身体にしみこませている。言葉のリズムを整え、言葉を歌い、身体が間合いを読み合いながら表現に陶酔する。他者と感染しその心持ちを味わう生活における芸術の神髄を感じさせるものである。

そして、それが仲間と感染し合うだけでなく、観客も巻き込んで心持ちを感染させる喜びを

子どもたちはよく知っている。保育における生活芸術は、他者の表現を見聞きしたり自ら表現したりする心持が相互に感染し合うところに意味が生まれるという意味では、保育界も、純粹芸術を手本として描かせる、歌わせる、言葉で言わせる、身体表現させる表現から、子どもたちが身近に取り入れている情報を引き出しながら、表現を創作していくことではなかろうか。

③保育運営の中心的役割を担う者の課題

かつて、新教育運動にわいた教育科学全盛の時代は、子どもの生活現象の中から課題を見いだして、その問題解決のために幼稚園や保育所は何をなせるか、教師は何をなすべきかを考えた。そしてそれらの課題を広く発信してどんな社会を築いていくことが子どもの幸せにつながるのかを市民とともに考え試行することが実践として意味をもっていた。幼児の抱える問題は社会現象の歪みであり、そこに注目することで幼児の生活をよりよいものにできると考えたからである。

しかし、日々幼児と接している担任は、幼児の抱える問題を敏感に感じ取っているが、明日の生活に追われて、その現象がどこから発生しどんな渦を生んでいるのか捉える余裕はない。社会現象から複合する問題を的確に把握し、園運営に反映させていくことを任務としているのは組織の中心となって園運営を担う者の責務である。その役割を担う者は、幼児や教師が家庭や地域社会における生活の何に興味をもち、どんな生活リズムで生きているのか、何を喜び、何を恐れ、何に悩んでいるのかを把握することが園運営の始まりである。園内だけでなく、背景にある家庭や社会生活に対する実態分析があつてこそ、運営課題が把握できるといえよう。流行に乗り、研究することもなく知的早教育を安易に取り入れたり、逆に毛嫌いしたりするのではなく、『にほんごであそぼ』のメディア情報が子どもたちの言葉や生活態度、遊びなどに与える影響を把握し、園の教育内容を考えていくことが必要である。遊びの伝承が薄れた今日は、遊びのテーマもメディア情報を共有している仲間内で発展される。園の生活リズムは、幼児の24時間の生活リズムと連動しており、そこに幼児のテレビやビデオ視聴と遊びの関係がある。『にほんごであそぼ』にも、10年先、20年先を見据えたメディアや企画監修者の意図があつて、それが日本語の世界を変えている。これらのことを踏まえて運営者は、次の世代の子ども達が確実に異なる日本語文化を獲得していることを予想していくことが必要であろう。

Ⅲ まとめと今後の課題

幼稚園教育要領が変わり、保育のシステム改革も進行している。また義務教育諸学校における学習指導要領も大きな変化を見せて、就学前教育のこれからの教育課題は多岐にわたっている。本研究調査では時代を先取りしたメディア情報によって子どもたちの日常知が変わってきている実態が明らかになった。保育界は、かつて教育科学が目指した社会の問題を把握し、時代が求める方向を教職員が共通理解していくという視点を失って社会と遊離し、経験則に流されてきたきらいがあるが、これも今日、大きな転換点を迎えている。

こうした背景から、保育運営担当者には社会現象を適確に分析し、保護者や子どもの発達の要求事項を踏まえた上で、それぞれの園の教育環境や教育内容を構成・組織する責務を担っているという自覚が今まで以上に求められる。園内研修においても、社会現象を読み解き、社会過程において何が課題かを把握し、教職員の意識と子どもの実態のずれを付け合わせて改善を図っていくことが必要であろう。今後、保育界の形骸化した表現活動に、メディア情報を陶冶する一つの研究資料として提供しつつ、生き生きしさが生まれる生活芸術・表現芸術が再創される保育の世界を模索していきたい。

引用文献

- 青木久子，磯部裕子編（2010）表現芸術の世界 萌文書林 pp272-281
 GOOD DESIGN AWARD
<http://archive.g-mark.org/2004/grand-kouho/04C01030-1.html>（2011.1.27）
 坂上浩子 概要 佐藤卓，ひびのこづえ デザイナー 佐合ひとみ 審査委員
 石井勲（1997）石井式漢字教育：0歳から始める脳内開発 蔵書房
 川端誠（1998）じゅげむ クレヨンハウス
 NHK にほんごであそぼ じゅげむ編
http://www.nhk.or.jp/kids/nihongo/song/index_22.html（2010.11.25）
 NHK 放送文化研究所 2008年放送研究と調査月報 10月号 幼児視聴率調査 <http://www.nhk.or.jp/bunken/research/title/month/2008/index.html>（2011.1.25）
 齋藤孝（2001）声に出して読みたい日本語 草思社，（2巻 2002，3巻 2004，4巻 2005，5巻 2007，6巻 2010）
 齋藤孝（2002）子どもの日本語力をきたえる 文藝春秋
 齋藤孝（2003）理想の国語教科書 文藝春秋，（赤版 2004）
 清水満（2010）表現的生としての人間 青木久子，磯部裕子編「表現芸術の世界」萌文書林，2010，pp11-18
 鶴見俊輔（1975）鶴見俊輔著作集第4巻：芸術の発展 筑摩書房

参考文献

- NHK 放送文化研究所（2008）生後6年間のメディア接触の実態 2003～2008年
 日本デザイン振興会（2005）グッドデザインアワード・イヤーズブック 2004-2005 丸善出版
 齋藤孝編，山本孝絵（2007）祇園精舎 ほるぷ出版
 小学校学習指導要領（2008）
 清水満（1997）共感する心，表現する身体 新評論
 トルストイ（1934）芸術とは何か（河野与一訳）岩波書店

（2012.7.27 受稿，2012.12.3 受理）